

十の住人

そこには、円を描く広場がある。広場の周りを、十のドアがぐるりと囲む。ドアの向こうには、住人がいる。

1 部屋

赤いドアが一つある。そのドアの先には、一人の男が住んでいた。

男は、赤いカーペットの上で、じつと頭を抱えてうずくまっていた。足を山のように折り曲げ、その上に額をくっつけている。彼の顔は、大きな両手で覆われている。

彼は、闇を見ていた。瞼の裏の、掴めぬ闇。ずっと見ている間に、闇はわずかに変化していく。最初にすべらかな緑。その両端から、明るい紫が忍び足でやって来る。緑の時代はつかの間に終わる。だが、やがては紫も遠くに沈み、再び緑が舞台に戻ってくる。緑も紫も、どちらも消極的だ。入れ代わり立ち代わり、す

ぐに奥へと去ってしまう。誰もいなくなった空っぽの空間。今見えているのはぎらついた粒状の紫。紫の粒は、わけない顔して暗闇全土に広がってゆく。

男は、腹と背とに寒さを感じていた。肌が出ているのだ。けれど、それを直すために手が動くことはなかった。彼の手は、顔を覆うことで忙しかった。

男は、この部屋のカーペットと同様の真っ赤なTシャツと、真っ赤なスウェットズボンといういでたちだった。ズボンの裾からは、蠟でできているかのような青白い踝が覗いている。

この男のことを、これからアカイと呼ぶ。アカイは、今、非常に気分が悪かった。寒さのせいではない。アカイの胸の内には、どうにも気に食わないものが存在していた。例えるならば、それは具材がドロドロに溶けたスープのようだった。

煮立って沸々と泡立ち、全部が全部混ざり合って説明のつかなくなった、そんなスープ。アカイは、そんなスープの存在をどうすることもできないでいた。

アカイの部屋には、特大のベッドと特大のソファがある。どちらも赤い色をしていて、どちらも部屋のほとんどを占領していた。アカイは、その二つの間で置物のように座っていた。

アカイは、ふと指に触れた自分の髪のことを思った。しばらく洗っていない髪は、脂ぎって指どおりが悪くなっている。さらには、埃や塵がくっついていていせいで、硬く、ざらついてもいた。

アカイは、今の自分の外見をあまり考えないよう闇を見続けた。こうなってしまったのも、このスープの感情が原因だった。はじまりはたしか、黒が訪問して来たときの話で……………。

思い出ただけで腹が立ち、不快なスープは一気に泡立った。アカイは吐き気がした。いまだかつて、このような感情に陥ったことなどない。アカイは、どうにかしてこの不快なスープから逃れなければならないと思った。

しかしながら、ことはそううまくいかない。名もなき気持ちは主をがんじがらめにして離さず、苦痛を与え続ける。どこにも解決策は見当たらない。

もう、どうにも手に負えなかった。いったい何が起きているというのだろうか。アカイはわからなかった。彼は、ただ闇を見続けることに専念した。赤い色を視界に入れないようにした。

赤。これは、アカイが好きな色だと信じ、自分に似合っていると信じてきた色だった。この色自身が自分自身だと、アカイは強く思ってきた。お前らしいよ。お前にぴったりだよ。やっぱお前はこうでなきゃな。そうして作った今の自分。

俺は赤のアカイであり、アカイの色は赤なのだ。逆にそうでなければ、俺は何者

だというのだろう。部屋のベッドやソファ、カーペット、これらは好んで集めてきた。……………はずなのに。

部屋の温度は、先ほどよりも下がったように思える。自分が動かないせいだろうか？ 石のような冷たさが、身の内から染みだしてくる。震えが一瞬、アカイの体を駆け抜ける。

こうなれば、着替えなくてはならない。アカイは何度目かの気合いを入れた。そう、アカイは何度か試みていたのだった。ちゃんとした服を着ようと動くことが、体は今回も拒否するつもりの方だった。アカイの体は、泥が詰まっているかのように重い。

彼の頭の中には、衣装箆の中身が浮かんでいた。そこには、ずらりと並ぶ赤のTシャツがあった。今までは何の抵抗もなく着ていた、赤のTシャツ。それを、アカイの中の何者かが、着ることを拒んでいる。

アカイは、目の裏の闇を見つめ続けた。溶けて沈んでいってしまいそうな、果てのない闇を。

俺はどうしてしまったのだろう。頭の中で、アカイは呟く。立ち上がって、箆筒をあさり、もっと温かい服を着ればいいのに。なぜ俺は抵抗する？ なぜ俺はこのままでいる？ なぜ俺は、ぐちゃぐちゃスープをどっかにやれない？

アカイは、胸の中のスープの渦を見つめた。汚い、何色ともわからなくなった、沸き立つスープを。やがてそのスープは、泡立ちと共に、何かの言葉を発しはじ

めた。最初はぶつぶつと、やがて、だんだんと音を大きくして。そうしてはつきりと、アカイに向かって言ったのだった。

「なあ、『赤』は本当に、お前の色か？」

殴られたような衝撃。アカイは驚愕し、ぶるりと震えた。アカイの吐き気は、最高潮に達した

赤は、俺だ。そうに決まってる。でなかったら、俺は何だというんだ。別の色にでもすればいいというのか。

だがそしたら、俺は俺でなくなってしまうじゃないか。赤は、俺を強くする。俺を鮮やかにする。俺を他人と区別する。だから今まで身にまとってきたというのに。

アカイは、顔を覆う手の力をぐっと強めた。

こんな恐ろしい考えは、速く捨ててしまわないと……。でなければ俺は、俺のままではられない。

遠く離れた向かいの部屋。

そこでは、黄色い毛布にくるまって、気だるそうにテレビを眺める女がいた。大きなクッションが山積みになった寝台の上。彼女は、その中に埋もれるようにしてテレビを見ている。コマーシャルの音声、アナウンサーの音声、無駄に多い効果音、ひび割れた笑い声。隅に置いてある黄色のオーディオから、ポップミュージー

ジックが流れている。音の境は、この部屋には存在しない。テレビの音も、オーディオから流れる曲も、すべて一つに混じって、空間を掻き乱している。

その中心に、毛布にくるまる女、キイロはいた。

キイロは、美しい黄金色の髪を、その手に通し続けていた。肩を包むその髪は、テレビの光を浴びて、なめらかに光り輝く。時折起こる身じろぎで、その髪は肩を這って静かに動いた。キイロは、毛先をくるくると巻いた。瞳はテレビの画面を見つめたまま。髪には一瞥もくれない。

彼女の部屋の壁には、キイロと同じような髪を持つ、美しい女のポスターが貼られていた。目と鼻と口、どれも素晴らしく整い、こちらを完璧な角度で振り返る。黒い肩出しドレスは、女の金髪に、より極上さを与えていた。

そんな女の二の腕あたりに、洒落た文字でサインが印字されていた。大胆で、自身に満ちた筆跡。「ゴールド」と。

キイロがゴールドのことを知ったのは、キイロがまだ大人とも言えない幼さの混じる少女であった頃だった。それまで、みんながほればれするような何かを

持ったことがなかったキイロは、とても平凡で、なんの取り柄もなく、隣の人の違いは何か問われてもまるで見つからぬ、つまらない存在だった。

だが、ゴールドに出会ってから、キイロは変わったのだった。最初の出会いは、とあるインタビュー記事。ゴールドは、世界的大女優として、紙面を飾っていた。ゴールドはそこで、紙面越しにキイロに言ったのだった。

「あなたの魅力は、あなたしか持っていない。それは常に、内側で待っているのよ」

キイロは、その日、心の中で涙を流した。内なる傷と痣が、安堵の悲鳴を上げた。自分にも、まだ、誇っていいものがある。

……あたし、この人についていこう。

キイロの中で、何かが強く固まりはじめた。それはやがて燃える闘志となって、自分改革の源力となった。そして、ゴールドに対する尊敬も、そのとき生まれたのだった。

優しく、思いやりがあり、献身的で、活発で、美しく、そしてジョークがうまい、ゴールド。素晴らしい女性。こんな人、他にいるだろうか。キイロは、花に惹かれるミツバチのように、ゴールドのことを追いかけた。彼女が残していく言葉を、一生懸命拾っていった。

それから流れた月日の中で、キイロは、どんなに毎日が多忙であろうとも、どんなに不当な扱いをされようとも、決して忘れないことがあった。ある一つの夢、ゴールドのように、美しく、尊敬される存在になる、ということ。

お金をかけることについて、キイロは若いうちに、ゴールドからその精神を学んだ。ゴールドは、お金についてこう言った。

「お金は悪いものだという考えは、私は納得いかないわ。お金というのは、私たちの活動を促すものだもの。私たちは石化しているわけじゃない。日々進化する

ために、前の自分よりももっとよくなるために、変化し続けなくてはならないの。そのために使うお金は、決して無駄ではないはずよ。いい投資は、きつと心を健康にしてくれるはずだから」

よってキイロは、お財布が許す限り、髪、爪、肌、目、さらに服など、自分に必要なものに投資していった。失敗もあったが、成功して美しくなった自分を見るのは、たしかにゴールドの言った通り、心の健康につながった。

キイロは、以前よりも確実に美しくなった。魅力的で、それに努力家であることが、周りのみんなから認められはじめた。キイロは、ようやく日の目を見たよくな気がして、はじめて生きた心地がした。このまま続けていけば、もっとよりよくなる。もっと人の目を引きつけられるようになる。もっと自信をもてるようになる。影にいた頃の自分に、もう戻らなくてすむ……。キイロはそう信じていた。

とある考えを、耳にするまでは。

キイロはその日、ゴールドが主演を務めた映画のDVDを鑑賞していた。何年か前のだが、ゴールドが出ているのだから観ないわけがない。

映画は、醜い少年が美男子になるために異世界へ飛ぶという内容で、その美男子役をゴールドが演じていた。ゴールドは髪を短髪にし、妖麗で掴みどころのない美男子をみごと魅力的に演じ切っていた。

視聴後、キイロは、特典映像として収録された、ゴールドと原作者家の対談をだらだらと見ることにした。これは、主演女優がゴールドだからであって、それ以

外の特別な理由はなかった。彼女の仕草、声、表情、考え、それらすべてを、目に、手に入れたかった。

テレビの向こうで、彼らは映画のテーマである「美しさ」について語り合っていた。

「例えば、人の魅力とはどこからくるかというのは、コミュニケーションを円滑にするためにおいて、非常に知りたいことだと思うんだ。本作品の主人公は、それに葛藤して、異世界にまで飛んでいくことになるんだけど……。ゴールドさんにとって人を美しくする魅力とは、いったいなんだと思います？

そうね。たしかに、美しい髪、美しい肌は、みんなが憧れるものだと思うわ。それによって、相手に好印象を与えられることも事実だし。けれど、重要なことはもっと他にあると思うの。例えば、この作品の主人公は、永遠に美男子になれる石を手に入れるけれど、途中で迷い込む『終わりの森』では、出口を見つけれないのよね。というのは、美しいだけでは問題は解決できないということなのよ。もともと、彼は自分の容姿についてかなりネガティブに捉えていたし、周囲の間もそれを助長していた。彼は、そんな現状を打破するために様々な困難を乗り越えていくことになるわけ。……で、私はそこに彼の魅力があったと思うのよ。彼の容姿は、悪事を働いて呪いをかけられた母親の影響によるものだと、後半になって判明するわけだけど、彼は、いろいろ闘い、向き合ってきたすえ、最終的には母親の過去と自分を認めはじめるのよね。消すのではなく、否定するのでも

ない……。私はね、この点こそ彼の中核だと思ったわ。彼が本来持っている、次へ次へと変化してゆく力、真実と正面から向き合おうとする力というのがね。

外見的な美しさとは、人を引き付ける力が非常に強い。だが内面的な美しさは、どうしても見過ごされがちになる。なぜなら、見出すために時間が必要になるからね。

そうね。代わりに外見だけの魅力は、すぐに色褪せていくわ。確実に。……」

キイロの呼吸は、浅くなった。キイロは、そのあとの内容が耳に入ってこなかった。ただゴールドの言った言葉が、ずっとずっと、頭から離れなかった。

それからというもの、キイロは変わらず美しさを保つことは続けたが、反対に、以前のような確固とした自信と楽しみは薄らいでいった。

今のあたし、ちゃんと綺麗よね？ いい感じよね？

鏡の前に立つたび、向こうのキイロに、キイロは問いかける。

でも、絶対に色褪せていくのよ。

鏡の中のキイロは、硬い表情をして警告する。

色褪せていくとわかっていながら、それでも綺麗でいる理由は何なの？ 今だけのため？ もし老いたあと、綺麗でなくなったら？

キイロは、向こうのキイロの目をしかと見る。

そしたら、また元の自分に戻るかもしれないの？

じわりじわり、その円の中に怯えの色が浮かび上がる。努力してきた自分が、変化した自分が、ベリベリと剥がれていく音が聞こえる。今まで目指してきた輝かしい塔が、崩れ去っていく。

キイロの部屋には、テレビの音が満ち溢れている。粉のように散る下品な笑い声。雑音の集合。壁のゴールドは、微笑みを向け続ける。

キイロは、必死にテレビを見続けた。音楽を流し続けた。今、テレビでは、近日公開する映画の主演男優が、ひょうきんな司会者と対話をしている。キイロは、藁にもすがる思いで耳を傾ける。

「……ええ、そうだと思いますよ、ミスターパープル。あなたの意見はごもっともです。世界は、ありとあらゆる誘惑、惰性であふれている。そこで変えなければいけないのは、私自身か、世界か……」

ああ。それには両方の歯車が必要だと思うね。僕らの意識と、世界の意識。それらは共に変えていかないといけないのではないだろうか。……だが、そこで変化の強要がはじまってしまうのはよくない。この場合、自らの気づきってというのが大事だから、他人が『変えよう』と強制するのは違うと思うよ。

だから、ほんとのところ、突き詰めて言ってしまうえば、誰が何になろうが、何をしようが、構ったことじゃないんだよ。例えば、あなたがもし犬ではなく馬と生きたかったら、牧場を経営すればいいし、または、馬の群れに飛び込んでいい

いんだ。仕事が嫌ならその辺に突っ立っていてもいいし、顔が気に食わなければ整形し……ってね。もちろん、それ相応の結果はついて来るだろうけどさ。

そうなるよ……、殺人はどうなるんですか？

(会場の皮肉めいたどよめき)

いいや、殺人はよくないね！ だって、その人の選択を奪っていることになるだろう。選択は奪ってはいけない。なぜなら、この情性に満ちた、意味もなく急ぎ、物にあふれ、無駄な贅沢と誘惑ばかりが満ちる世界に選択がなかったら、それこ

そ本当に世界の言いなりになってしまふよ。生き抜くには、選ぶ力、選択能力がないと。でないと、自分を見失ってしまうのではないだろうか。

自分を洗う洗濯能力も必要ですよねえ！

(会場の笑い声)

さあ、ミスターパープル、そろそろお時間になってしまったようだ。さて、最後に何か言いたいことがあるんじゃないかな？

そうだった。僕が主演を務める映画、『惰性の恋人』は本日公開だ。『限定あまあまべつとりシュガーポップコーン』を食べながら、惰性の世界に思う存分浸ってくれ。もちろん、僕の『特製ミニ人形』を買うこともお忘れなく。

『ミスターパープルの熱いキッスびりびりホットポップコーン』は？

(会場の歓声)

それは、見るだけで十分味わえるさ。

(会場の悲鳴に近い歓声)

さあ！ 今日公開の映画『情性の恋人』！ ミスターパープルのイケメンショットを見るか見ないかはあなたの選択ですよ！ まあ、今テレビを情性でご覧になっている方々はきつと見にいくと思いますがね。今日のゲストは、魅惑たつぶりミスターパープルでした。ではまた来週！」

陽気ででたらめなエンディングソングが流れる。制作者の名が列車のごとく走り去っていく。観客の拍手の中、司会者とミスターパープルが笑顔で何か言葉を交わす。

キイロは、上の空だった。自分の爪に目をやる。青々と光り輝く、豪奢な爪。このマニキュアも、ゴールドがつけていたものだった。敬愛するゴールド。その力が爪先に宿るだけで、一日の仕事を乗り切ることができる。彼女に一步でも近づいたような気になる。

その力は、まだ信じていいはずよ。

確かめるように、キイロの目は鏡を向く。

（平気よ。髪は美しい。肌も綺麗。あたしは最高だわ）

— そう言ったすぐあとから、別の声が聞こえる。

本当に？ そんなの慰めにすぎないわよ。目のところを見てみなさい。なんて膨れあがってるのかしら。ひどい顔。ずっと怠けて、テレビばかり見て。その髪なんて作り物みたいじゃないの。ま、そんな髪もいずれ萎びるわ。ほら、頬のあ

たりに皴ができてるわね。年をとったのよ。いずれ、綺麗な肌も手放すことになるわ。つまり、結局、元の不細工女に……

(うるさい、黙って)

ゴールドが言ってたじゃない。彼女が言ったんだから真実よ。ずっと綺麗でいることは絶対にできないわ。

鏡の中のキイロの目に、恐怖の色が浮かび上がる。そうすると、さっきまで信じようとしてきたものが、すべてまやかさに思えてくる。

青色の爪と、輝く巻き毛。その中にうずまる自分の顔は、目も当てられないほど最低なもの。瞼はどろりとむくみ、瞳は死んだように濁り、眉はほとんどなく、えらは、あざ笑うように膨らんでいる。

あたしってば、よくこんな顔して生きてこられたわね。

突然出てきた言葉に、鏡の中のキイロの顔はぐつと歪む。それがいつそう醜く、キイロは嗚咽を漏らした。

キイロは、慰めを得ようとなめらかな髪に触れた。だが、その感触もやがては自分の身から去るものと気づくと、彼女の手は、ぱつと髪から離れた。

手の先の青い輝き。顔を縁取る金のきらめき。今までキイロを最大限に引き出していたものたち。だが、今となっては、キイロを責めているようにしか思えなかった。お前、せめてもの間、俺たちに合うような顔をしろよな、と。

キイロは舌打ちをして、毛布にくるまった。

ここでは何も、見ることはない……。闇は何でも隠してくれる。

キイロはため息をついた。このまま、永遠にこうしているのもいいかもしれないなかった。

そこから二つ離れた、黒の部屋。黒の部屋には、誰も近づきたがらなかった。

黒は、実のところ、何をしているのかわからなかった。だが、外出をすることは多いようだ。彼の部屋は常に鍵が閉まっており、内側には誰もいない。

黒の部屋は、一つの四角で成り立っていた。入り組んだ間取りは、彼の部屋には存在しない。箆筒、ベッド、本棚に書齋机。物は少なく、家具も、使っている形跡がほとんど見られなかった。何もかもぴったりと納まっており、偽物ではないかと疑いたくなるほど清潔だ。

だが、彼の部屋には何か好ましくない雰囲気漂っている。物がなきすぎるせいだろうか？ それとも、人の気配がしないせい？ それとも、何か別の理由があるのだろうか。

彼の部屋は、静まり返っている。

緑は、手を頭の後ろに組み、足を壁に預けた直角の姿勢のまま、ぼうっと考えごとをしていた。

目の前にそびえる苔色の壁の、上の方。そこには、横に長い小さな四角い窓があった。窓からは、かすれた雲の腹がわずかに見えた。

緑は、この窓のことを嫌っていた。なぜなら、景色の半分も見せてくれないからだ。他の窓は、ここへ来たときから蜘蛛の巣だらけで、汚くて触っていない。そ

れに、開けたところで、隣の家の壁が見えるだけだった。そこで残されたこの小さな窓だが、あんなに上の方にあつては、ただの空しか見えなかった。木や他の家々、道路を散歩する人々、それらがまったく見えやしない。あの窓からやってくるのは光だけだった。そんなものだけじゃ、緑は物足りない。緑は、変化を見せてくれる窓が欲しかった。そっちの方が、断然楽しいに決まっている。

緑は、空しか見えない窓を眺めながら、よくよく考えた。あの窓のせいで、この部屋は居心地が悪く感じる。はたして、もっとよくするにはこれからどうすればいいだろう。

緑は、何も無い苔色の壁をじっと見つめた。じっと見ていると、細かな質感へ目が行く。砂粒みたいな凹凸、親指大の染み、何かをこすったときにできた傷、よくわからない黒ずみ、覚えのない飛沫。壁には一ミリの隙間もありやしない。

砂粒のような凹凸の間には、完全なる結束が見られる。緑は、ひどく窮屈な気分になってきた。

彼は、再び視線を窓に移し、くすんだ青空を見つめた。

どうせなら、あの窓を開けることができればいいのに。あの細長い窓には、鍵がない。なぜなら、開けるようにできていないからだ。あれは光を入れるためのもので、緑のご要望とは違って、景色を見せるためのものではなかった。

だが、緑はそれが気に食わなかった。彼が欲しいのは、開放感であった。変化であった。刺激であった。

緑は、風が吹き抜ける部屋が欲しかった。小鳥のさえずりが近くで聞こえ、日の光が思う存分に当たり、人々の声がかすかに届く、そんな部屋が。

それに、緑は一人が嫌いだった。完璧な個室は大の苦手。閉ざされた空間なんでもってのほかだ。誰かの存在を感じることに、外と同じように風が吹き抜けること、自由を感じることに。それが緑の大事なことで、かつ、理想であった。

しかし、現実とは違う。現実には狭く、どこか息苦しく、寒くて、孤独で、自分ではどうにもならない見えない壁に囲まれている。

緑は、部屋を囲む壁に視線を移した。ぐるっと目を回し、四枚の壁と、一枚の天井を見やる。無言で重圧をかけてくるそののっぺりとした面に、緑は次第に憤りを感じはじめた。それは、何度話してもまったく通じない頑固者たちと、ずっと顔を合わせているような気分だった。

緑は、壁にかけていた足を降ろして起き上がると、胡坐をかいて壁と対峙した。そうして何をするかと思えば、おもむろに壁に爪を突き立てた。三日月型の凹み

が一つで上がる。緑の顔に笑みが浮かぶ。交差させるように、もう一つ傷を作る。

壁に変化が現れた。わずかな変化だが、三秒前とはまったく違う、確実な変化が。

傷をつけた緑はそこで、とある計画を思いついた。緑の顔に、さっきよりも深い笑みが刻まれる。頭の中で計画がどんどん立てられていくにつれて、その笑みはより強くなった。

緑は考えたのだ。この無味乾燥で、僕を閉じ込めている壁。これを壊してしまえばいい、と。

そうすれば、好きなだけ空を見ることが出来る。大好きな風が、外にいる開放感を常に与えてくれる。たしかに、寒くなることは確実だし、雨も虫も入ってくる

だろうけれど、だからどうした。きつとその苦勞は、僕を変えるだろう。いいにしろ、悪いにしろ。だがとにかく、この牢獄からは抜け出せるのだ。

緑は、頭の中でそこまで組み立てると、満足し、寝っ転がって、足をまた壁に預けると、目をつむった。

行動は、休息したあとにやるのが肝心だ。ここまで考えただけで、僕はたいそう偉い。

緑はそうして、何をすることもなく、いびきをかきはじめた。

白い部屋というのは、空間に広がりをもたせ、清潔感を与え、光を美しく見せる。そんな白い部屋の二階にて。

吹き抜けの手すりに寄りかかり、広い一階を物憂げに見下ろすのは、背の高い人物だった。その人は中性的で、男でも女でもなかった。

これからシラと呼ぶこの人は、自分が中性的であるということを見出し、自分に告げ、自分を受け入れ、そして、周囲に告げた過去を持っていた。周囲が受け入れるか受け入れないかはそれぞれだが、シラは、自分を自分で気づけたことに対し、たいへん評価していた。

シラは、手すりに寄りかかりながら、コーヒーを飲んでいた。ここでこうして休息をするのが、シラはとても好きだった。

シラの仕事は、文を書くことだった。翻訳、エッセイ、コラム、物語、その他なんでも書いている。シラは、作業がひと段落すると（または行き詰まると）、

ここへ来て、一階を眺めながらコーヒーを飲んだ。俯瞰することは、シラにとって、物事を整理するのに非常に役に立つことだった。

今回も、シラは考えごとをまとめるために、ここに立っていた。部屋は静寂に満ちている。ありとあらゆる角、隙間に、柔らかな静けさが満ち満ちている。白い壁紙が、いつそう部屋を非現実的なものに見せている。夢か写真か。画面越しに見る、切り取られた静けさ。シラはその中にいる。

……いるはずだが、なぜか心は、静けさになじめなかった。シラはそれが落ち着かなかった。静寂は好きはずなのに。どうしてだろう。シラの胸の内は、部屋とは反対の様子を見せている。小さな虫が羽を震わせて飛び回っているかのよう、細かな震えが内を支配している。

シラは音楽をかけようと、書斎にあるオーディオのスイッチを入れた。クラシックが流れ、絶妙な音のバランスが、なめらかに空間を駆けてゆく。

普段なら、この音の流れに身を任せ、それを楽しむのがシラだった。シラは、なんとかその律動を身の内に入れ、わがものとしようとした……………。

以前のシラは、自分に臆病だった。何が正解かわからず、周りの目を見て、一挙一動を気にしながら、毎日を過ごしていた。だが、そこで自分の中でずれを感じ、長い時間をかけて、自分と向き合い、対話してきた。自分の好みと、他人の好み。自分の望みと、他人の望み。右か左か。赤か青か。選択するか、それとも否か。その旅は非常に辛く、ときに自分を傷つけながら、けれど、真摯になって自分と

歩んできた。そうしてようやく、本当の自分を知ることができるようになったのだ。それは周りのおかげでもあるし、闘ってきた自分の成果でもあった。

その経験は、今のシラを輝かせている。シラはその経験を、今の仕事にいかしている。

……が、この胸の底に食欲う焦りと虚無は、いったい何なのだろう。

もしかすると、私はまだ何か望みがあるのだろうか？ それとも、他に何かやり残したことがあるのだろうか。いったい何が原因なのだろう。シラは考える。シラの耳には、もはや音楽は入っていないかった。シラはずっと考える。自分にとって何が満足いかないのか、原因をはっきりさせようと、脳の中を探っていく。

広く、静かで、落ち着いて、美しい。それが前からの望みだったのに。そんな部屋の中に、自分はあるのに。

(やり切ってしまったのだとしたら?)

思いがけずやって来たその考えに、シラは、はっとした。

だが、その先を考えようとすると、暗雲が胸の内にはたこめた。シラはぎっと首を振った。きつと、まだ充分に楽しめていないだけさ。シラは思う。ようやく仕

事が入って来るようになったというのに、ここでもう満足したというのか？
まさか、「飽きた」なんて言うんじゃないだろうな。

いいや、そんなことはない。自分もつとやれる、やれることはある、ここで終わると思えない。達成したとは言い切れない。

これは、たぶん仕事のしすぎだ、絶対に。

シラは何度もコーヒーに口をつけ、今のことは忘れようとした。

湿気たかび臭い部屋。だが、隅のストーブには、しっかり火が灯っている。

その前で、背の曲がった老人が、収穫したそら豆の皮を剥いていた。部屋のペラ
ンダで栽培したそら豆。片腕ほどのプランターで、細々と、そのそら豆たちは育
った。老人の手により、そのそら豆たちは皮を剥がされてゆく。諦めた吐息を漏

さすがごとく、そら豆たちは、皮を難なく手放す。残るのは、情けなきそうに皺を寄せる、痩せた実たち。

老人は、色の褪せたカーディガンを着ていた。何年も着ているのか、毛玉がたくさんでき、裾の糸もほつれている。彼の住む部屋は、カーディガンと同じく、すべてが色褪せていて、茶けていた。

チャヤ、とこれから呼ぶ老人は、もう長いこと「話す」ということをしていなかった。妻も子どもも、もちろん孫もない彼は、ひっそりとこの部屋で暮らしていた。物がひしめき、踊る影が老人を覆う、小さな部屋に。

チャヤは、黒ずんだ爪で皮を剥き、中身を口に含んで食べた。皮は、足元の桶に落とされていった。

もう足は重く、動かすことも億劫だ。チャヤの腰は、ちょっと体勢を変えるだけで痛みの悲鳴を上げた。チャヤは、死を望んでいるわけではなかったが、これ以上の変化も望んでいなかった。ただ、誰か、言葉を交わす相手が必要としていた。彼の唇が食事以外で動かされたのは、いったいいつのことだろう。

チャヤの頭の中では、それほど面白い思考はなされなかった。チャヤの頭の中では、思い通りに動かなくなった体に対する悪態が、延々と繰り返されていた。痛い。くそ。ああ、辛い。この三つ。

チャヤは、一日のほとんどを、テレビを見て過ごしている。内容は、頭の中に入っていない。つけて、音を流しているだけだからだ。どんなおかしいことも、恐ろしいことも、驚くことも、チャヤにとっては、脳の表面をかすめるざわついた霧でしかなかった。

以前は、本を読んだり、散歩に出かけたりして、テレビ以外にも時間を潰す方法があった。けれど、読書は次第に悪くなってゆく目に応えるし、また、一度台

所で転倒し、足を骨折してからというものの、散歩に行くのは億劫になってしまった。今となっては、椅子とベッドが相棒だ。

椅子に埋もれながら、またはベッドで寝っ転がりながら、チャヤはテレビを見続ける。テレビの笑い声や音楽は、耳の悪い彼には雑音にしか聞こえない。

最近のテレビから流れる音楽や話し声は、すべて昔よりも速いように、チャヤは思う。それに、新しい言葉が増えてきてしまって、まるでわけがわからなかった。頭文字の略称なんて、もう暗号だ。

こう、すべてが速いと、錆びた頭はまったくついていけなかった。目玉も同様、ついていけなかった。理解し、驚くこともできないまま、次々と物事は変わっていく。

チャヤにも、世界を理解したいと思う心はある。だがそれとは反対に、体のありとあらゆる機能は、日々重く、遅くなってゆくのだった。外の世界とチャヤの世界との開きは、どんどん広がるばかりだ。

チャヤはいっしか、知ることをやめていた。どれほど追いかけようと、手を伸ばそうと、こうして老いてしまうと、若い頃よりも格段に気力と体力がいるのだ。

チャヤは、じりじりと削られてゆく命を思いながら、淡々と皮を剥いていく。皮は下へ落ち、また小さく剥がされ、また落ちてゆく。

今、テレビでは、昼の散歩番組がつけられていた。のんびりとした人の話し声は、チャヤに辛うじて世界とのつながりを教えてくれる。

潰れた帽子をかぶった老人が、洒落たパン屋の戸を開ける。あいつはよく動けるもんだなど、そら豆を食いながらチャヤは思う。それからまた、ちびちびと皮を剥きはじめる。人の話し声を、つまみにしながら。

老化防止に興味をはじめよう、夜のテレビは、そうお勧めする。医学の番組だ。

そこでは、灰色の髪をはやしたやつら（チャヤは同類を、皮肉をこめてそう呼ぶ）

が一緒になって、老後の生活をどうすれば楽しめるか議論している。その時間自体がまさに皴だらけだと、チャヤは思う。

チャヤは、それをつけておきながら眠りに落ちた。干からびた番組からは、何をすることも無いと思って。

チャヤは夢を見ない。トイレにすぐ起きてしまうからだ。その心配をしながら、闇の中に漂っている。

脳の中は、もう何年も静止している。

その部屋の、隣の部屋。そこには、アオという者がいた。アオは、ずっと過去に苦しめられていた。

彼女は、読書や絵画、詩や歌など、芸術を愛する者だった。それに、自分でも創作をする、アーティストだった。

彼女の部屋には、様々な絵が描き上げたときのまま並んでいる。まるで、異なる世界を覗ける窓であるかのように。色が成す踊りとお話を、絵は、見る者に無言で提供する。

アオは、何も無い空間や白紙に自分を落とし込むことに、日々いそしんでいた。今は、白い画面をクレヨンで塗りつぶしている。点、線、面。波紋、歪み、鋭角。円、直線、四角形。跳躍と歌。そして、笑みと泣き。

彼女は、今度は風景を描きはじめた。夢に見た自分の場所だ。日の当たる丘の上に、花の咲き乱れる庭。そこに、小さな木の家が建っている。空の色は常に移り変わり、雲が壮大な物語を教えてくれる。

アオは、しばらくの間、その風景を描き続けた。

だが、その制作の手は、突如止まった。

過去からの波が、怒濤のように押し寄せてきた。こうなってしまうと、彼女はとうすることもできなかった。腕の中に、自分ではない何者かの腕が入り込んで、押さえつけているかのように、彼女の体の自由は奪われてしまう。アオは、静かに呻いて待つしかない。その、くっついて離れない過去の波を、彼女は黙って耐え忍ぶ。

過去への引き金は、いたるところに存在した。朝露に輝く草、組んだ足、列車の走行音、誰かの笑い声、スピーカーから流れるひび割れた歌、整列したペットボ

トル、写真を眺めるとき、バスに乗るとき、駆けるとき、床に入るとき。そして、明け方の滲んだ薄闇の中にも。

アオはクレヨンを握りしめ、やって来た過去の波を追い出そうとした。溺れまいと、必死に必死に息をする。

「……もう、あいつはこないわ。絶対来ないわよ。こんなところまで、来るはずがない」

アオの手の中で、クレヨンが、ぼきつ、と折れた。

アオは、黒が大嫌いだった。

さて、これで何人の部屋を見てきただろうか。

次で八人目の部屋になる。八人目は、橙夫人の部屋だった。

橙夫人の部屋には、子ども部屋がいくつかある。けれど、それらの部屋にはひと気がなく、がらんとしていた。

橙夫人は、居間でアイロンがけをしていた。かつては山のようにあつた洗濯物が、今は二人分しかない。夫と自分の分。ただそれだけ。彼女は、洗濯物を前にして、じつくりじつくり、実に丁寧にアイロンをかけていた。

以前は、こうして一枚一枚にアイロンをかける暇などなかった。湯気をたてながら、アイロンは船となって、服の皺の海を進んでいく。

はて、はじめにアイロンを船のようと言ったのは誰だったかしら。橙夫人は物思いに耽る。一番上の娘かしら。それとも想像力豊かな三番目？ いいえ、上の受け売りをよくやる下っ端坊やかも……。

思い出すだけで、寂しさが増した。あーあ、あのときは二秒でもいいから一人にさせてと思ったけど、今は二秒でもいいから誰か来てほしいわ。二番でも五番でも、誰でもいいから。夕方色に染まった部屋を見渡しながら、橙夫人は思う。橙夫人は、だが、その染みる痛みをどうにかすべく、この頃ずっと考えていたことについて、意識を向けた。

このまま何もしないんじゃない。何かやりたいことをやらないと。

夫人は、頭の中で趣味探しの旅に出た。園芸、手芸、料理にヨガ、何か資格をとるのもいいかもしれないわ……。

でも、いったい何のために？

誰かがそうして陰で囁いている。アイロンをかけていた橙夫人の手が、ふと止まる。

(もちろん、自分のためよ)

もう一度、アイロンの船は動き出す。

そうだとしてもよ、園芸は何のためにやるのかしら。私、土いじり好きだった？

(土いじりは癒しになるわよ) もう一人の自分がすぐに答える。

癒しねえ。ところがね、花は、育てても、喋らないのよ。花を咲かせて、実を落とすだけ。それってなんとも、味気ないと思うのよ。

(それがいいんじゃないの?) もう一人は、自信なさげに呟く。

でも、魅力を感じないわ。私、花より団子なのよ。そう、みんなで花見に行ったとき、『母さんは花を見ないで食べてばっかだね』と言われたじゃない。

(手芸はどう?)

手芸はもういいわよ。今までどれほど、ボタンをつけたり、靴下の穴を縫ってきただことか。

アイロンは、右へ左へと動き回る。

(ぬいぐるみや洋服を作ってみたら?)

そんなの、みんなが小さかった頃にやってあげたかったわね。作っても、そもそもあげる人がいないじゃない。私、手芸もそんなに好きじゃないのよ。上手でもないしね。

(料理は? 料理は好きでしょう?)

そうね、料理は好き。献立を考えるのも、混ぜたり焼いたり、彩りよく飾りつけするのも好きよ。……………。でも、待って。食べるのは私と主人しかないわ!

主人は食べられればいいという質だし、私だけ喜んで虚しいわよ。そう、子ども

もがいなくなつてから、料理はほとんど買つて食べてる。そっちの方が楽だし。

料理の腕を磨いても、喜んでくれる人がいなければ……。

アイロンは、止まったり進んだりを繰り返す。

(やっぱり、何か習つてみましょう。そうだわ、そうしましょ！ いろいろやってみることがあつたじゃないの。例えば、ほら……)

橙夫人は、はたと動きを止めてしまった。橙夫人は、ある恐ろしい事実に気がついてしまった。

私、やりたいことが一つもない。時間と気力を注いでやりたいもの、そういったものが一つもない。

橙夫人は、アイロンを立てかける。蒸気が端から漏れ出ている。夕陽が哀しくそれらを照らす。

私は、いなくなつてしまったわ。橙夫人は、胸底に重く広いものが現れるのを感じた。私は、子どもと共にいた。子どもといるのが私だった。あの小さな者たちが去つたとき、きっと私も出ていった。

橙夫人は、自分が干からびた雑巾のように感じた。多忙という汗の上を何度も駆け抜け、絞られ、ようやく残つた、くたびれた雑巾。

私の価値は、あの子たちと共にあつたのだわ。

橙夫人はそこで、落ちてしまいそうな恐怖に陥つた。

この生ぬるい空虚をなんとかしなければ、私は私ではいられなくなつてしまうのかもしれない……。

夕日色の部屋は、隅から暮れの闇に染まりはじめた。アイロンの船は、縦に傾いだまま、沈黙した。

ミスターパープルの部屋は、とても豪華だ。豪華であるが、ごたごたと装飾がない交ぜになったものではなく、実に洗練された、無駄のない部屋だった。もともと、飾り立てるものが嫌いなのだ。彼は、選りすぐりの、優秀なものしか選ばなかった。だから、家具には派手な装飾はなく、突拍子なもの、センスのない色の組み合わせのものなどなかった。ミスターパープルは、統一こそが美しさだと思っていた。

さて、様々な局からの取材からやっと解放されたミスターパープルは、革製の椅子にどっかり座り、テーブルに足をのつけて、片手で酒をあおりながら、磨きあげられた窓からの夜景を眺めていた。

あそこでどれくらいの間が暮らし、身を粉にして働いていることだろう。ミスターパープルは、酒を舐めながらぼうつと考える。

道路という血管の中で、ハザードの赤血球が流れていく。同じ部屋が右にも左にも、上にも下にも続くビル。あそこでは、何もかもが同じになる。机も、企画も、

話しも、人も。部屋の光は、どこも同じ明るさで光っている。飛行機が点滅しながら、ライトアップされた塔を過ぎてゆく。

ミスターパープルは、何時間もその景色を眺めていた。夜も更け、ハザードの赤血球が数を減らそうとも、彼は窓の外を眺めつづけた。

どろりとした疲労を持つ静寂。霧がかかった思考。そんな中、電話の着信音が耳を打った。ミスターパープルの頭の中で、何かが、かちつ、といった。力の抜けていた彼の顔に、仕事の顔つきが戻ってきた。それと、わずかな苛立ちも。

コールに出ると、予想どおり、マネージャーからだった。どうやら、とある局からだめ出しが来たらしい。ミスターパープルは、目を淀ませ、ため息をついた。

「僕が言ったことに対して、局がどう思おうが知ったことじゃない。………じやあ、僕をもうあの局に連れていくな。……ああ、それで向こうが納得するんなら………。苦情の電話？ 知らないよ。僕の言ったことの何が………ああ、そうかよ。だが自由に発言してくれと言ったのは向こうだ。………視聴者は視聴者だろう。……ああ。……わかったよ、これからは控えるようにする。………ああ、じゃあ、また」

ミスターパープルは、再びため息をついて電話を切った。椅子から立ち、睡眠薬をとりに行く。

自分は自分、他人は他人だと、なぜわからないのだろう。ミスターパープルは重々しく顔を拭った。まったく、個人の意見に干渉しなくてもいい。世の全員にとって心地よい意見を言うだなんて、そんなものは不可能だ。それぞれ相違

があつてこそなんだから、受け入れるも受け入れないも自由のはずなのに。なぜ、同調を求めるのだろう。

薬瓶を開けるミスターパープルの顔に、諦めの色がちらつく。彼は、何度目かのため息をつき、睡眠薬を飲み下す。

革張りの椅子に身を投げ、天井を仰ぎ見る。やがて訪れる、ねっとりした眠気。そこでミスターパープルは、天井にマネージャーが張り付いている幻影を見た。マネージャーの手には、糸が握られていた。それは垂直にミスターパープルの方へ下りていて、手首や足首につながっている。マネージャーがくいつと右手を動かせば、ミスターパープルの右手も、くいつと上がった。

「おい、こんなことしてる場合じゃないぞ」
あまりよく動かなくなった口で、ミスターパープルは言った。天井のマネージャーは、にこにこ愛想笑いを向ける。

と、そこで天井の板が外側へ外れた。そこには、満天の星空が広がっていた。白く小さな星たちがちらちらと光り……。

いや、それはミスターパープルの勘違いだった。星は大勢の人間たちの両目であった。目たちは、ミスターパープルをじつと見下ろしていた。目たちは、ミスタ

パープルの隅々までを眺めてくる。首から顎にかけてのライン、手と足の角度、うなじ、耳の裏、後頭部とつむじ、鼻の穴から脇の下まで。

ミスターパープルは耐えきれなくなつて、汗を流して震えた。ぎらりと鳥肌が立つ。だが、マネージャーはお構いなくミスターパープルに話しかけた。

「君、『限定あまあまべつとりシュガーポップコーン』を気に入ったんだね！そりゃあ、よかった、よかった、よかったよ！」

マネージャーは、手を叩いて喜んだ。すると、彼の手からピンク色のポップコーンが弾け現れた。雨のように、ポップコーンはミスターパープルの顔に当たる。ミスターパープルの顔は砂糖でべたついた。

「僕はこんなもの好きじゃない。気に入ったわけでもないぞ。宣伝してくれと言われたから言ったんだ！」

「君に一つこれをやるよ」マネージャーは何かを投げた。それは、ミスターパープルを模った人形だった。「君にあげても、まだ百万体もあるからな！」

人形は床に落ちて、首が折れた。ミスターパープルは、思わず吐き気がした。

「あんた、自分がどれほどの無駄を作ってるのか知ってるのか！ こんなもの、ただのプラスチックの塊だ！ すぐごみ箱行きだ……」

「おい、待てよ。ミスターパープル。自分を過小評価しすぎだ。君は誰もが憧れるスターなんだよ？ それはもう自覚してもらわないと。お客は君を永遠に手にしておきたいと思ってる。君を見て、君を愛し、君を手に入れ、また君にお金

をかける。そのサイクルは、君を大きくするために、もっともっと速く強くしなければならぬのだ」

「僕は演技ができればそれでいい。ポップコーンも人形も、それほど必要なものじゃないだろ。どうせただの一瞬の思い出作りにしかならん。ゆくゆくは忘れ去られてごみだ。僕は、ごみを最小限に済ませたい質なんだよ」

「馬鹿。何、子どもみたいなこと言ってんだよ。君は有名になりたいのか？ なりたくないのか？」

「そりゃ、仕事はしたいが……」

「だったら、文句はないだろう。君はただ口をばくばく動かしてりゃいい。あとのことは全部こっちに任せておけ」

マネージャーは背を向け、星の目のファンたちに、ポップコーンと人形をばらまきはじめた。悲鳴ともとれる甲高い歓声。

ミスターパープルの上に、雪が舞いはじめた。破かれた人形パッケージの雪。折られた首の雪。ポップコーンの欠片の雪。音もなく、ミスターパープルの足元に積もり積もってゆく。

折られた首たちは、はあ、はあ、とため息をつく。ひりひりと痛む傷口。人形の目は空を見つめ、やがて光を失ってゆく。

ミスターパープルは泥のような疲れを感じていた。眠りの魔の手が、すぐそこまで迫っている。ミスターパープルは、瞼を閉じた。人形と同じように、自身も永遠の眠りにつけばいいのに……。

「ミスターパープル！」

右腕が、がんつ、と上がった。ミスターパープルは、背中でワイヤーが鋭い音をたてるのを聞いた。体は宙に浮き、手足が無様にばたついた。

「踊るんだ、ミスターパープル！」

マネージャーが目の前にいる。彼は、手の中の木片を激しく動かす。ミスターパープルの体も、それに伴って激しく動く。

「そうだ、その調子だ。うまくやってくれよ！」

マネージャーはにこにこ笑って糸を操る。ミスターパープルは、酔ってしまったて声が出なかった。

「笑え、笑え。幸福だろう？ ポップコーンは幸福の味！ 自分の人形は幸福の証！ 当たり前だ！ そうだよなあ？ お前は求められているんだ。だから、笑って当然だ。さあ、笑え、笑え！」

ミスターパープルは逆さ吊りにされる。その反転した景色の中で、マネージャーは言った。「うまくやらんと、こういうことになる」

ミスターパープルは、はっとした。マネージャーは、ミスターパープルとまったく同じ顔をしていたのだ。

ミスターパープルは手を放し、ミスターパープルはぐしゃっと地面に落ちた。重々しい倦怠感がミスターパープルの体中を満たしはじめた。ミスターパープルは震えながら、何度目かのため息をついた。